はじまりのモニュメント

ー縄文晩期における墓配置の一事例ー

松 室 孝 樹

目次

１．はじめに
２．相谷熊原遺跡の縄文時代晩期墓地について
３．配石の持つ意味ー石棒・石皿を用いた祭儀ー
４．規則性をもった配列
５．はじまりのモニュメント

― 論 文 要 旨 ―

本稿では、東近江市相谷熊原遺跡で検出された縄文時代晩期中葉の土坑墓・土器棺墓について、墓地内での配置のあり方について再考した。発掘調査報告書では、土坑墓の造墓が先行し、基本的には土坑墓から土器棺墓へと埋葬方法が変換していくものとして捉えたが、再検討の結果、土坑墓から造墓活動が開始されてはいるが、必ずしも土坑墓から土器棺墓へと一律に墓制が変換したわけではなく、両者が混在しながら造墓されていた可能性もあることが配列関係から窺われることを指摘した。

土坑墓・土器棺墓の造墓にあたっては、線状・環状の配列構造という規範が存在しており、これに基づきながら造墓していくと同時に、一部では両者がお互いを干渉することなく配置されている状況も確認できた。これらの基準となったのは、造墓の最初期段階に造られた配石墓であり、その上部の配石（石列）が墓地のモニュメントとしての役割を果たし、全体の配置構造を規制していた可能性を指摘した。

キーワード
相谷熊原遺跡　縄文時代晩期　土坑墓　土器棺墓　配石　石棒　石皿　線状配列　環状配列